

もしものときの支え

杉渕和穂（秋田・秋田市立泉中学校）

夏休みに入る数日前、梅雨前線の北上に伴って北東北に線状降水帯が発生した。その影響で秋田県に記録的な大雨が降り、広い範囲で床上や床下浸水が起きるなど、大きな被害をもたらした。テレビでは常に避難情報が流れ、外ではバケツをひっくり返したような雨が降り、やむ気配はない。これからずっと雨が降り続けば、家が浸水したり流されたりしてしまうのではないかと恐ろしかった。

梅雨前線が秋田県を通り過ぎ、晴れの日が続くようになった。幸い、私の住んでいる地域では大きな被害は出なかったものの、街中では商業施設の濡れて使えなくなったイスやテーブル、売り物にならない食品や電化製品、本などの数え切れないほど多くの廃棄物が外に置いてあるのを見かけた。電気がついていない店の前には「臨時休業」と書かれた看板があり、被害の大きさを物語っていた。いつもとは百八十度違う景色に言葉を失った。テレビでも連日大雨の被害状況が報道され、私たちの平穏な生活は当たり前ではないことを思い知らされた。今回の大雨による被害額は、土木施設が県全体で百八十一億六千二百二十万円、農業関係は八十八億八千五百四十七万円だと報じられた。被害額を新聞で知ったとき、想像もできないほど大きな額だと感じた。この大雨は秋田県に深い爪痕を残し、大きな損害を与えたのだ。

そんな中、秋田県は被災した人たちに補助金を給付することを決めた。各家庭の被害状況に応じて、最大三百万円から百万円が支給されるらしい。これをテレビで見たとき、この補助金はどこから来るのか不思議に思った。気になって母に聞いてみると、「税金が使われているよ。」と教えてくれた。今まで、税金は学校や図書館などの公共施設の運営にしか使われていないと思っていたが、母が教えてくれたことで、災害時の給付金にも使われていると分かり、驚きと同時に、税金の使い道の多さにも気付かされた。給付金は、被災した人たちが生活再建をするための一助となるだろう。さらに調べてみると、災害廃棄物の回収や処理、被害調査のための職員の派遣にも税金が使われていることが分かった。税金は、被災した人たちを支えるためにも使われていて、税金を払うことで、いつ来るか分からない災害に備えている。そう思うと、税金があることが心強く感じた。

日本で暮らしている以上、地震や大雨などの災害を避けることはできないし、いつ自分が被災者になるか分からない。しかし、税金を払うことは、予期せぬ災害に見舞われたとき、自分や誰かが被災した際の助けとなるのだ。私も将来就職し、納税者となるだろう。社会を支える納税者になるために、税金がどのように使われるのかについて理解を深めていきたい。そして、税金は、もしものときに自分や誰かの支えになるということを心にとめておきたい。